



2022年3月発行 日本先天代謝異常学会 広報委員会：高橋 勉、酒井 規夫、松永 綾子、小須賀 基通、菅野 潤子(特別)、菊池 敦生(特別)



JSIMD News Letter

多田啓也先生

追悼号



多田 啓也先生 ご略歴

昭和5年10月20日 生まれ

《 ご略歴 》

昭和29年 3月 東北大学医学部卒業

昭和30年 3月 東京大学医学部附属病院にて医学実地修練終了

昭和30年 4月 東北大学医学部大学院特別研究生(小児科)

昭和32年12月 東北大学医学部助手(小児科)

昭和33年 3月 米国メリーランド大学小児科学研究室リサーチ・フェロー
(昭和35年3月まで)

昭和38年 1月 東北大学医学部講師(小児科)

昭和41年 9月 米国メリーランド大学客員教授(同年11月まで)

昭和46年 2月 大阪市立大学医学部教授(小児科)

昭和52年 8月 東北大学医学部教授(小児科)

昭和63年 4月 東北大学医学部附属病院長併任、東北大学評議員
(平成4年3月まで)

平成 5年10月 退官

平成 5年11月 東北大学名誉教授

《 主な受賞歴 》

昭和57年 9月 Noel Raine賞(欧州先天代謝異常学会)

昭和58年 5月 日本ビタミン学会賞

昭和58年11月 日本人類遺伝学会賞

昭和60年11月 日本医師会医学賞(日本医師会)

平成元年11月 武田医学賞(武田科学振興財団)

平成 2年11月 日本先天代謝異常学会賞(日本IBM賞)

平成 5年 3月 上原賞(上原記念生命科学財団)

平成 5年 6月 日本学士院賞

平成13年11月 勲二等瑞宝章



JSIMD News Letter TADA MEMORIAL

1987年5月26日～30日
第4回国際先天代謝異常学会 (ICIEM)
仙台：仙台プラザホテル



1987年5月26日～30日
第4回国際先天代謝異常学会 (ICIEM)
仙台：仙台プラザホテル



1992年5月28日-29日
第44回日本ビタミン学会
仙台・市民会館



多田啓也先生の御逝去を悼んで

一般社団法人 日本先天代謝異常学会 理事長
国立成育医療研究センター
奥山 虎之

2022年2月13日、仙台で「多田啓也名誉教授お別れの会」が、開催された。私は、現理事長として、本学会を代表して、お別れの言葉を述べる大役を仰せつかった。以下、ここに私がお別れの会で述べたことを記述する。

日本先天代謝異常学会を代表して、多田啓也先生にお別れの言葉を述べさせていただきます。

日本先天代謝異常学会は、日本小児科学会の分科会であり、先天代謝異常症の病態解明・診断治療法の開発などに関する研究を行う学術集団であります。本学会は、1965年「小児代謝研究会」として発足しました。多田先生におかれましては、本学会の前身である「小児代謝研究会」設立当初から多大なお力を頂きました。1992年から1999年の8年間、第2代理事長として学会の発展と私たち後進の指導にご尽力いただきました。特筆すべきことは、第4回国際先天代謝異常学会 (ICIE) を1984年に仙台で開催されたことです。先天代謝異常症の国際学会を日本で初めて開催され、日本の先天代謝異常症研究の発展に寄与されました。先生なくして、日本先天代謝異常学会の今の発展は考えられません。本当にありがとうございました。

2009年本学会が、第50回学術集会を迎えるにあたり、学会誌に50回記念特別号を発刊することになりました。私は、記念号編集担当幹事となり、歴代理事長の多田先生にもご寄稿をお願いしましたところ、原稿用紙6枚に達筆な手書きの玉稿をお送りくださいました。今でも、原稿とともに先生直筆のお手紙を大事に保管しております(図)。今回、この原稿を再度拝読し、あらためて先生の学問・研究に対する真摯で厳格な態度に感銘を受けました。以下、抜粋したものを代読させていただきます。

「筆者は、昭和30年4月、東北大学小児科教室へ入局した。昼は診療、夜は実験という多忙な医局生活を過ごすうちに恩師佐野教授の計らいでリサーチフェローとして留学する機会が与えられた。旧制中学3年の時、祖国の敗戦を経験した私は勝者である米国を自分の目で見たいという願望があった。学問的動機というよりは、むしろ好奇心で勇躍横浜港を渡ったのは1958年3月27歳の時であった。サンフランシスコに2、3日滞在し、飛行機で大陸横断しボルチモアのメリーランド大学へ着いた。私に与えられた研究テーマは、フェニルケトン尿症の代謝異常を深く追求することであった。

教授の指導を受けながらも、半分以上は独学で悪戦苦闘しながら実験を進めた。この時期に学んだこと、すなわち基礎となる所見を踏み固めたうえで論理的に実験を進め、

その結果を忠実に考え、次のステップに進むという研究方法は、私の研究のプリンシプルとなった。研究とは所詮 Individualなものである。

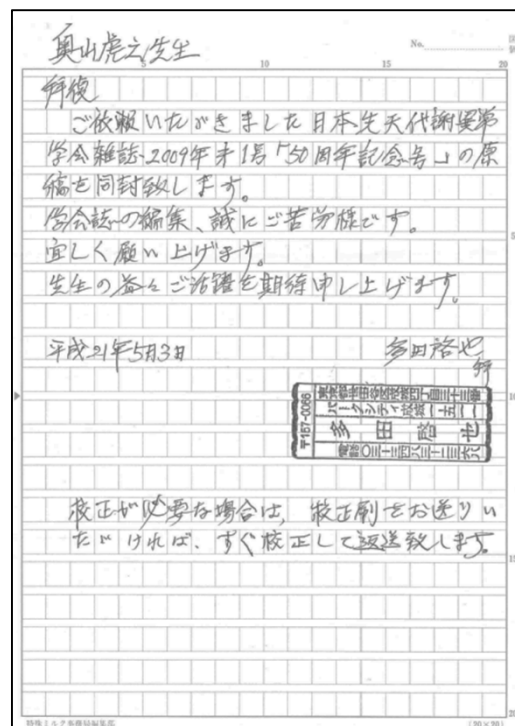
当時、米國小児科学会の若手研究者は、次々と新しい代謝異常症を報告し、活発な討論を展開していた。それは、当時の日本の年功序列の学会とは全く異なった世界であり、この雰囲気魅せられた私は、以後、先天代謝異常症の研究をライフワークとすることになったのである。今振り返ると、わずか2年間であったが、この20代の米国留学がその後の私の生き方を決定したといっても過言ではない。感受性豊かな若い時に異文化に触れ刺激を受けることは素晴らしいことであり、後輩にもそれを勧めている。本学会の将来は益々洋々たるものがあり50年を一つの節目としてさらに発展をとげることを祈念してやまない。

平成21年5月 東北大学名誉教授 多田啓也

以上、多田先生の日本先天代謝異常学会50周年記念寄稿文を代読させていただきました。ご留学の際受けたインパクトを活力として、私たち学会員を指導し学会を牽引してくださいということに改めて痛感いたしました。

昨年、2021年12月に日本先天代謝異常学会は、一般社団法人「日本先天代謝異常学会」となりました。先生のもとで産声を上げ、成長してきた日本先天代謝異常学会は、法人化によりようやく社会的にも一人前の学術集団となりました。日本先天代謝異常学会学会員を代表して、これまでの先生の学会への多大な貢献に感謝の意を表するとともに、心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

2022年2月13日



<多田啓也先生直筆のお手紙> 日本先天代謝異常学会雑誌「50回記念号」の原稿に添えて筆者がいただいたお手紙。

多田啓也先生を悼んで

第3代 日本先天代謝異常学会 理事長
東京慈恵会医科大学名誉教授
衛藤 義勝

多田 啓也先生の訃報をお聞きしたのが今年の9月中頃でした。既に8月27日に亡くなられたとのこと、大変残念に思いました。

振り返ってみれば、私と多田啓也先生とのお付き合いは半世紀に及びます。最初に御目にかかったのは、未だ代謝研究会と言われていた頃で、昭和41-43年頃かと存じます。私がまだ学生の時代、北川照男先生の代謝研究室にお邪魔していたころ、昭和40年に国分先生が世話人で代謝研究会を慈恵の講堂で開催し、その折に多田先生にお会いしたと思います。当時の印象としては、全然飾らない先生で、非常に卒直に又研究会でも度々鋭い質問をされていたことを思い出します。その後私は昭和44年から米国、スイスに留学し、多田先生とはお会いする機会はありませんでしたが、帰国後昭和51年に青木菊麿先生が開催した第19回代謝研究会でお会いし、又1980年スイスのインターラーケンでの ICIEM の国際学会では先生とは大変親しくお話をさせて頂き、これからは国際的活躍が大事だと私共を激励して頂きました。又昭和62年1987年に多田先生は第4回 ICIEM を仙台で開催され、当時ハーバード大学クンケル教授を招聘され、筋ジスの遺伝子のクローニングの講演、又 PKU の食事療法を開発した Bickel 教授、OTC 欠損症で有名なエール大学 Rosenberg 教授など世界の早々たる研究者が講演され、大変大きな感銘を受けました(写真1)。



(写真 1)

1984年第4回国際先天代謝異常学会 (ICIEM 仙台にて
左から Desnick 教授、多田教授、Bickel 教授夫妻

又私が2006年第10回 ICIEM を主催させて頂いたのも多田教授が影で応援して頂いたお蔭で、盛大な国際会議を開催できました。写真 2 は第10回での Rosenberg 教授、Desnick 教授、多田教授 又 写真 3 は北川教授、イタリアの Giovanni 教授との ICIEM での記念すべき写真です。



(写真 2)

2006年第10回国際先天代謝異常学会 (ICIEM 幕張にて
左前列 Desnick 教授、Rosenberg 教授、後列 多田教授



(写真 3)

2006年ICIEM (幕張)での記念写真
左から北川教授、衛藤、Giovanni 教授(ミラノ大)、多田教授



さて、多田教授の学問的功績はご承知のように高グリシン血症でグリシン開裂酵素欠損を発見され、朝日賞、学士院賞など大変素晴らしい賞を受賞され、国際的レベルに日本を持ち上げられた先生でもあります。多田先生は何時も世界を観て、私共に大きな活力を与えて頂きました。先生が東北大学をご退官されてからは仙台 NTT 病院の病院長をご退任された後、東京に引越され、私の住まいとも近く、時々お会いすることもありました。又軽井沢に先生は別荘をお持ちで、私も一度軽井沢の別荘にお邪魔し、代謝異常症の夢を語り、又わが国の学問の方向性をご教示いただきました。時折成城の街で奥様と御一緒に散歩され、人生を楽しまれておられる姿を懐かしく思い出します。多田先生は小児科医として又研究者として国際的業績を残され、人間的にも非常に魅力のある先生が亡くなられたことは大変残念あります。どうぞ先生、天国から若い先生方に多くのことを啓示して頂きたいと存じます。先生のご冥福を心からお祈り致します。

多田啓也先生を偲んで

第4代日本先天代謝異常学会理事長
熊本大学名誉教授
くもと江津湖療育医療センター総院長
遠藤 文夫

多田啓也先生は第2代日本先天代謝異常学会理事長として学会を指導され、我が国と世界の先天代謝異常症、人類遺伝学、小児科学分野のほか、ビタミン学や脳科学にまで及ぶ広範囲な領域に影響を与える偉大な業績を残されました。私自身、多田先生と様々なことで接する機会がありましたが、その思い出のすべてを語りつくせるものではありません。そのなかで、とりわけ多田先生が熊本に来られた数少ない機会の思い出を紹介します。

私が熊本大学小児科の松田一郎先生の教室に入局してすぐのころ、1970年代の終わりころですが、熊本まで来られた大阪市立大学教授時代の多田先生の講義を聞く機会に恵まれました。アミノ酸代謝異常症における脳障害のメカニズムに関する研究などのお話をされました。講義のあとと質疑応答になり、ヒスチジン血症の脳障害についての質問をしました。これが多田先生と初めて言葉を交わした機会でした。次に熊本でお会いしたのは昭和60年(1985年)に松田一郎先生(当時熊本大学医学部小児科教授)が熊本で第28回日本先天代謝異常学会を開催された時と記憶しています。

当時、東北大学教授になられていた多田先生は、第4回国際先天代謝異常学会議(ICIM)へ向けて精力的に準備を進めておられました。第28回日本先天代謝異常学会総会でICIMの準備状況の報告をされた時の写真が残っています(写真1)。この学会には松田会長が米国からNIHのKatz先生とマウントサイナイ医科大学のロバート・デスニック先生をお招きしておりました。デスニック先生はICIMの成功のために多田先生と協力して、さまざま努力されておりました。その一つがKatz先生のご接待でした。Katz先生とデスニック先生は接待を伴う飲食の場がお好きだということで、みなさんを夜の街にご案内いたしました。この時は多田先生もご機嫌で大いに楽しんでおられました。観光にも案内しないといけないということになって、Katz先生と多田先生の二人を阿蘇火山見物に案内しました。多田先生がKatz先生やデスニック先生と親しく交流されたのはICIMの成功に大いに役に立ったのは間違いのないと思っています。

多田先生の学問的な業績、学会の発展へのご貢献、先天代謝異常症の臨床へのご貢献、後進の育成など、そのご活躍は枚挙にいとまがりません。私自身は長年にわたり親しくご指導ご鞭撻頂きましたことを人生の宝と思っています。本当に幸運でした。先生のご冥福を心からお祈りいたします。



(写真 1)

1985年11月第28回日本先天代謝異常学会総会(熊本)においてICIEの準備状況を報告する多田先生



(写真 2)

1985年11月熊本にてKatz先生(NIH)と第2代理事長多田啓也先生を囲んで、松田会長、初代理事長北川照男先生、第3代理事長衛藤義勝先生。

多田啓也先生を偲んで

第5代日本先天代謝異常学会理事長
東京慈恵会医科大学小児科学講座
井田 博幸

日本先天代謝異常学会第2代理事長多田啓也先生が2021年8月27日にご逝去されました。日本先天代謝異常学会第5代理事長として先生の思い出を記載して追悼文といたします。

私が先生と初めてお会いしたのは1987年仙台で開催された第4回国際先天代謝異常学会(ICIE)でした。当時、私は大学卒業後6年目で学会の要職にも就いておらず、国際学会会長の多田先生は私から見ると神々しく、雲の上の人のように感じたのを覚えています。この学会がアジアで初めて開催される、そして大変な労力を費やして開催される記念すべきICIEであることなど私は知る由もありませんでした。この学会のまとめは日本先天代謝異常学会雑誌13巻—30年の歩み—(1997年発行)にまとめてありますので是非、ご覧ください。

次に記憶に残っているのは1990年にアメリカのアシロマで開催された第5回ICIEの懇親会での出来事です。多田先生はパーティーでスルスルと金髪の女性の元に近づき、何か話すと颯爽と女性とダンスをして楽しそうにしていました。自分の思ったことをすぐに行動に移す積極的な、そして自由奔放な先生という印象が強く残っています。

2000年にイギリスのケンブリッジで開催された第8回ICIEでは多田先生と奥様と一緒に宿泊施設に泊まりました。この時はICIEを日本に誘致するため日本先天代謝異常学会が一丸となって頑張っていました。多田先生は赤い法被を着て私たちと一緒に日本誘致のためのパンフレットを外人に配って下さいました。ここまでの記載でお分かりのように多田先生は日本の国際的なプレゼンスを上げることに非常に熱心な先生でした。衛藤先生が2006年に開催された第10回ICIEの会長に選出された時にはまるで自分が会長に選ばれたように喜んで下さいました。

私が慈恵医大小児科教授に就任した時には祝賀会に奥様とおいでいただき、祝福して頂きました。また私が日本先天代謝異常学会理事長に就任してからは理事長としての在り方をご教授いただきました。晩年は成城に住まれており骨折で狛江にある慈恵医大第三病院に入院されたとの情報が本院病院長の私のところに入ったのでお見舞いに伺ったところ大変、喜んで下さいました。これが多田先生とお会いした最後でした。

多田先生は研究心が旺盛で多くの業績を上げられた素晴らしい研究者である事は誰もが認めるところです。その一方で周りのことなど気にせず興味あるものに突き進む、嬉しいことがあると子供のようにはしゃぐ天真爛漫な先生でした。2025年にはICIEが日本で開催される予定



JSIMD News Letter TADA MEMORIAL

です。多田先生には日本で開催される3回目のICIEMを雲の上から見て楽しんでいただき、天国からサポートして下さい。合掌。



第10回ICIEMにて
左から 私、多田先生、衛藤先生、鈴木先生、多田先生
の奥様、大橋先生



多田啓也先生の教え

早坂 清

1977年、多田啓也先生が大阪市立大学から東北大学医学部小児科学教授となって戻られ、先生のライフワークである高グリシン血症の研究を進めることになった。高グリシン血症の研究は、当初から東北大学医学部の医化学研究室(菊地吾郎教授)との共同研究で、私が医化学研究室に派遣されることになった。高グリシン血症には、ケトージス型高グリシン血症(メチルマロン酸血症やプロピオン酸血症による)と非ケトージス型高グリシン血症がある。後者の病因として、現在では次世代シーケンサーによる解析が進み、幾つかの新たな病因が報告されているが、当時は、グリシン開裂酵素系の障害のみが明らかにされていた。患者さんでは、この酵素系の全体の活性のみ解析されており、構成酵素である、P、H、T、Lの4種の蛋白についての解析が求められた。症例について、解析を進めるとともに、治療困難な疾患の出生前診断も試みることになった。P蛋白やT蛋白の欠損による高グリシン血症、ケトージス型高グリシン血症におけるH蛋白の二次的障害、絨毛を使った酵素学的な出生前診断などの論文を作成した。分子生物学的研究は、呉繁夫先生(東北大学教授)が中心となって、P蛋白遺伝子のクローニングと多くの症例の遺伝子解析を進め、病態の解明が大きく進展した。私自身は、秋田大学医学部小児科学教室(高田五郎教授)でT蛋白遺伝子のクローニングと欠損症の解析を行い、高グリシン血症の研究は終了させた。1993年、多田先生と菊地吾郎先生が高グリシン血症の研究で学士院賞を受賞された。日本の臨床・基礎の研究者の協力により世界に先駆けて病態が解明され、またグリシン開裂反応の生理的意義が明らかにされたことが評価されたものである。多田先生は、「研究は限りなく自由なもので、個人の能力による」と話され、私自身、特に研究上の指示は受けず、自由に研究させて頂き感謝している。多田先生は、教訓的なお話は殆どされなかったが、ある時、列車の中で「或る教授が自家中毒は味噌アレルギーだといい、スタッフに研究させた。若い人の才能と時間を無駄遣いしてはいけない。そうした指導者にはならないように」と話された。卒業間もない若い私にはお話を理解出来なかったが、後日、指導的立場になり、先生が話された事を理解できた気がした。研究の開始時には、具体的な指示は必要であるが、若い人の才能と時間を無駄遣いするような指導はしないように注意して過ごしてきた。多田先生を始めとする優秀な方々が創設された日本先天代謝学会は、世界の学問をリードする開かれた学会であった。多田先生のご冥福を祈るとともに、日本先天代謝学会の益々の発展を願っている。

多田啓也先生追悼文

宮林こどもクリニック
宮林 重明

多田啓也名誉教授が令和3年8月27日に亡くなられたとお聞きし大変驚きました。東京にお住まいで、最近同窓会にもご出席されていなかったのが近況がわからずに過ぎていました。前年骨折され、リハビリ中に誤嚥性肺炎でお亡くなりになったとのことでした。ご逝去を悼み、謹んでお悔み申し上げます。

先生は昭和52年8月に、大阪市立大学小児科教授から母校の東北大学小児科教授に着任されました。私は昭和52年の卒業生で、ストレート研修の時代だったこともあり、卒後すぐに入局したので一期生となりました。前任教授の故荒川雅男先生の退任前2-3年は、スポーツが盛んになり、明るい教室でしたが、新教授就任ということで、医局内はやや緊張した雰囲気変わったような気がしました。多田教授の我々一期生に対する就任挨拶で、「小児科は日の昇るところの医療であり、内科は主に日の沈むところの医療である。君たちの未来は、揚々としたものになるだろう」と話しかけられました。その言葉を聞いたとき、自分の選択した道は正しかったと気概がみなぎったことを覚えています。後の東北大学教授の土屋滋先生、秋田大学および鳥取大学の助教授に就任された田澤雄作先生を含めた先生が「7人の侍」と言っていた先輩が、しっかりと臨牀と研究を支え、故成澤邦明先生が研究を先導していた時代でした。

先生は、就任当時から大変精力的、情熱的に仕事されていました。やはり研究に熱心で、その頃の教室員は、診療終了後夜遅くまで仕事をしていました。また先生は国内外の多数の賞を受賞され、教室員の誇りでもありました。医局の行事、特にお花見、芋煮会は大変好きで、春のお花見は新入医局員が入ることもあり、若い人に夢を語り、激励することがうれしかったようです。医局旅行の参加はなかったですが、毎年行われていた芋煮会には喜んでよく出席されました。たまたま来日していたR.Desnick教授が参加したこともあり懐かしく思い出されます。

個人的なことになりますが、先生の勧めで米国留学の機会を得ました。小さいことではなく大志を持って仕事している姿を見てきなさいということでした。またミトコンドリア病の研究では、欧米を含めたその分野の著明な研究者にお会いする機会も与えてもらいました。それらに応えることが出来ませんでした、大きな経験をさせてもらいました。

多田先生と衛藤先生は先天代謝異常学会の日本の双壁であり、衛藤先生が現在も若手の研究者に叱咤激励を飛ばしている姿をみて、安心しておられると思います。先生のご冥福とご家族のご多幸をお祈り申し上げます。

多田啓也先生を偲んで

国立成育医療研究センター理事、東北大学名誉教授
松原 洋一

多田啓也先生の訃報に接し、一つの大きな時代が終わったことを実感しています。先生は、名実ともにわが国の先天代謝異常症研究の黄金時代を牽引された偉大なリーダーでした。この分野の研究と医療の発展に多大な貢献をされるとともに、数々の人材を育成されてきました。海外での知名度も高く、世界的なProfessor Tadaとして先天代謝異常症分野の国際的な発展と交流にも存分にその力を発揮されました。訪問先の欧米の大学や学会で歓迎され著名な研究者や臨床家と交流される様子や、国際学会でも臆せず颯爽と質疑応答される姿はまさに憧れの存在でした。その白眉は、1987年に日本での誘致開催に成功した第4回国際先天代謝異常学会(仙台)でした。当時の世界の最先端の研究者を一堂に集めた学会は、単なるお祭り騒ぎではない、未来を予感させる充実した会議でした。その後、日本の研究者が次々と世界に先駆けた遺伝子解析研究を行うきっかけになったともいえます。多田先生は、日本の小児科の狭いコミュニティだけで満足してはいけない、といつもおっしゃられていました。まず内科領域と対等に渡り合える学問レベルであるべきだ、日本小児科学会の分科会の中で日本先天代謝異常学会は「小児」という名称を冠していない数少ない学会のひとつだということがご自慢でした。実際、1980-90年代には、その後わが国のゲノム研究で活躍することになる内科領域などの研究者も、最先端の知識を得るために日本先天代謝異常学会大会に参加されていました。先生は、学会での質疑応答などでは直截的で厳しい発言をされていました。昨今よく見られる発表者への過度の賛辞と忸怩した質問などはなく、サイエンスに対する真摯な姿勢から発せられたものだったと思います。

さらに先生は、まだインターネットもメールもない時代に、海外の著明な研究者や臨床家との交流を通じて、世界と肩を並べるわが国の先天代謝異常症研究、さらには小児科学の発展を企図しておられました。その背景には、1960年代の留学中に実感された日米の大きな格差があったと思います。1980年代後半、先生が満を持して文部省の大型科研費を取得し、多くの研究者や臨床家から成る研究班を組織されました。当初の研究班は基礎研究、症例解析研究、遺伝子治療研究の3本の柱から成り立っていました。ところが、当時の文部省が遺伝子治療を忌避し、この部分を削除しないと研究費を認めないと強硬に主張したため、先生は泣く泣く遺伝子治療研究をあきらめざるを得ませんでした。ところが1990年代に米国でADA欠損症の遺伝子治療が成功すると、日本の文部省や厚生省が慌てて研究を「規制」するための論議を開始しました。わが国での研究開始は欧米諸国に比べて大幅に遅れたのです。現在、海外で開発された種々の遺伝子治療

が臨床で著効を示し、わが国に輸入される現実を見るにつけ、40年以上まえの多田先生の慧眼に感心させられます。

先生は、現役を退かれてからは、それまでの精力的でアグレッシブな活動とは打って変わり、奥様と仲良く悠々自適の生活を楽しまれていました。老害によって次の世代の活躍を邪魔してはいけないという見事な引き際でしたが、もう少し現役として後輩に活を入れていただきたかったと思っています。晩年は体調を崩され、コロナ禍もあり、ついにお目にかかることができなかったのがたいへん残念です。多田啓也先生のご冥福を心よりお祈りいたします。



日本小児科学会賞(2009)を受賞された際の食事会にて。前列左より、多田啓也先生、千代子夫人、後列左より、呉繁夫、松原洋一、大浦敏博、早坂清、久米晃啓、坂本修、小松崎匠子(敬称略)

多田啓也先生の思い出 ～先天代謝異常学への多大な貢献～

仙台市立病院臨床検査科
大浦 敏博

日本先天代謝異常学会の第2代理事長で、我が国の先天代謝異常症の臨床と研究に多大な貢献をされた多田啓也先生が令和3年8月27日ご逝去されました(享年90歳)。多田先生のご指導を受けた一人として多田先生を偲び、その業績の一端を紹介させていただきます。

多田先生は1954年(昭和29年)東北大学を卒業され、1年間のインターン後に東北大学小児科教室(佐野保教授)に入局されました。1960年(昭和35年)米国留学から戻られ、東北大学小児科荒川雅男教授のもとで先天代謝異常症の研究を開始されました。1962年新生児期より筋緊張低下、無呼吸発作、けいれん発作を呈する患児に遭遇、当時代謝異常症の診断に用いられていた尿ペーパークロマトグラフィーを実施したところ、大量のグリシンが排泄されていることを発見されました。これが非ケトン性高グリシン血症との出会いで、多田先生のライフワークとなる研究テーマとなりました。そして、1969年東北大学医学部医科学教室の菊地吾郎教授との共同で、グリシン開裂酵素の異常であることを世界に先駆けて報告されました。高グリシン血症の研究により今まで不明であったグリシンの主要代謝経路が初めて明らかにされたこととなります。代謝異常症の研究はこの様に「病態を通して生理を知る」ことに繋がるのだという事を我々医局員は常々聞かされていました。

多田先生は1971年(昭和46年)、大阪市立大学小児科教室に教授として迎えられました。70年代はわが国の新生児マススクリーニングの黎明期にあたり、大阪地区では1968年よりガスリー法によるフェニルケトン尿症の新生児スクリーニングが、1972年よりマルチプルスクリーニングが試行されていました。北川照男先生(日本大学小児科)、成瀬浩先生(国立精神衛生研究所)らと共に厚生省心身障害研究班を組織し新生児マススクリーニング体制の確立に努力されました。特に、多田先生は対象疾患の治療指針作成に多大な貢献をされています。そして、1977年秋より行政レベルで全国において5疾患を対象とした新生児マススクリーニングが開始されました。また、1974年11月には本学会の前身である小児代謝研究会の第17回学術集会を主催されています。

1977年(昭和52年)8月に、荒川雅男教授の後任として東北大学小児科の教授として戻られました。当時私は医学部5年生でしたが、先天代謝異常症の研究に興味がありましたので、2年間の初期研修後小児科に入局しました。当時多くの研究グループがありましたが、テーマは特に指示されるわけではなく、各自自由に研究を行っていました。多田先生にはいつも「教科書を書き換える仕事をしなさい」とハッパをかけられていました。この時期の多田先

生の業績として高アンモニア血症の簡易スクリーニング法(アミチェック)の開発があります。ベッドサイドで簡便にアンモニアを測定できるので、現在も国の内外で広く使用されています。高グリシン血症の研究も早坂清先生(前山形大学小児科教授)、呉繁夫先生らを中心に進められました。1993年(平成5年)には高グリシン血症の蛋白レベル、DNAレベルの異常、さらには発症機構を世界に先駆けて解明した業績により、菊地吾郎教授と共に学士院賞を受賞されています。

教授在籍中最も大きな行事としては1987年5月26～30日の5日間、本学会とも関係の深い第4回国際先天代謝異常学会(The 4th International Congress of Inborn Errors of Metabolism)を仙台で主催されたことです。国内からは本学会員を中心に約350人、海外からは30か国約250人の計600人余りの研究者が参加しました。当時は先天代謝異常症の分子遺伝学的解析が始まった時期であり、多くの疾患の遺伝子解析結果が報告されました。また、筋ジストロフィーの原因遺伝子の発見など新規遺伝子の発見や遺伝子治療の細胞レベルや動物実験レベルの研究成果がトピックスでありました。

平成3年(1991年)の本学会役員選挙で多田先生が第2代理事長に選出され、平成12年3月まで3期続けられました。大浦が事務局を務めることになりましたので、平成4年3月末に日本大学駿河台病院小児科を訪問し、初代理事長の北川照男先生や大和田操先生から事務局の引継ぎを受けました。学会雑誌編集も事務局の仕事で、第8巻2号より仙台で発行することになりました。表紙のデザインも新しく二重らせんをモチーフにしたものにしました。細胞核の図柄がゲゲゲの鬼太郎の目玉親父に似ていると言われたこともありますが、現在の表紙にも受け継がれています。事務局の仕事は役員会の準備など大変でした。特に理事会ともなると学会の大御所の先生が集まりますので、緊張の連続でしたが、多くの高名な先生と知り合う事が出来、私のにとって大きな財産となりました。

理事長の在任中の大きな仕事として、「30年のあゆみ」記念誌の発行がありました。平成7年(1995年)秋田での第38回年次集会時の理事会で企画立案され、その後1年余を経て学会雑誌の特別号(第13巻1号)として発行することが出来ました。国内外からの祝辞、歴代運営委員長・理事長、各年度学会会長とプログラム、学会賞・奨励賞受賞者や学会の沿革、名誉会員を囲んでの座談会など貴重な資料満載の読み応えのある内容になっています。次は2025年が創立60周年にあたりますので、是非記念誌を発行して頂きたいと思います。

最後に、多田先生は長年の業績に対して数々の賞を受賞されていますので、年代順に紹介させていただきます。昭和57年Noel Raine Award(欧州先天代謝異常学会)、昭和58年日本ビタミン学会賞、日本人類遺伝学会賞、昭和60年日本医師会医学賞、平成元年武田医学賞、平成2年日本先天代謝異常学会賞(日本IBM賞)、平成5年上原賞、日本学士院賞「高グリシン血症の研究」、平成21年日本小児科学会賞「高グリシン血症に関する研究―病態を通して生理を知る」。

この様に、多田先生は先天代謝異常症、新生児マススクリーニングの発展に多大な貢献をされました。これからは天国から我々後輩を見守り、叱咤激励して下さいます様お願い申し上げます。多田先生から頂戴したこれまでのご恩情に心より感謝申し上げます。



1990年6月
米国Asilomarでの第5回国際先天代謝異常学会後、
サンフランシスコでのツーショット

多田啓也先生の思い出

宮城県立こども病院
呉 繁夫

多田啓也先生のご冥福をお祈り申し上げます。

私は、1982年に多田啓也教授が主宰されていた東北大学小児科に入局し、5月から仙台市立病院で小児科研修を行いました。当時現在のような各科をローテーションする初期研修はなく、最初から小児科のみの研修でした。2年間の小児科研修後、多田先生に大学院進学をお願いし、研究生活が始まりました。入局当時から私にとって多田先生は雲の上の存在で、近づき難いオーラを感じていました。大学院2年の時、多田先生が仙台で第4回国際先天代謝異常学会を主宰され、海外の著名な研究者と議論される多田先生の姿を見て、感じたオーラの源を理解しました。大学院の研究テーマの一つが、高グリシン血症という先天代謝異常症の「病因遺伝子を決定すること」でありました。多田先生は、「original work、originality」という言葉をよく口にされ、高グリシン血症は小児科病棟に入院された兄弟症例の病態解析に端を発する、多田先生のoriginalityそのものでした。当時は病気の原因遺伝子を明らかにする「遺伝子ハンター」時代であり、様々な遺伝子クローニングの報告がトップジャーナルに掲載されていました。「遺伝子ハンター」研究に憧れを抱いていた私は、この多田先生から頂いたこの新しい研究テーマへの挑戦が始まりました。

当時の病因遺伝子の探索は、戦略は、ヒト遺伝子構造がすべて分かっている現在とは異なり、遺伝子構造もすべて自分で決定するという、気の遠くなるような手間のかかる作業でした。実際、やってみると多くの困難がありましたが、何とか2年下の大学院生であった久米晃啓先生（現自治医科大学教授）と一緒に高グリシン血症の原因遺伝子を見出すことができました。多田先生は、1993年に「高グリシン血症の病態解明」の業績で、菊池吾郎教授（東北大学医学部医化学教室）と共に日本学士院賞を共同受賞されています。

多田先生は、大所高所から小児科学教室のあるべき姿を考え、行動する教授でした。1987年には、初の大学院講座「病態代謝学教室」を設置し、初代教授には当時小児科助教授であった成澤邦明先生が就任され、私は助手に採用されました。当時は分子生物が隆盛を極めた時代であり、PCR法、リバーシ・ジェネティクス、蛍光標識を使った自動シーケンサーなど、新たな解析手法が続々と発表されていました。新しいものに目がない私は、この様な新たな技術が発表される度に飛びつきました。ご指導頂いた成澤教授や松原洋一助教授には、非常に自由な雰囲気遊びのような研究をお許し頂いたことに心から感謝しています。沢山の研究テーマに目移りし、研究が



全くうまくいかなかった際、私に多田先生から「stick to your bushes」とのお言葉を頂きました。当時はその言葉の意味を完全には理解できませんでした。「研究には好奇心にまかせて新しい手法や分野に進んでいく遊び感覚も必要。一方で、仕事として研究を行って行くには時代により変わらないoriginality (bushes)が必要。」を指している事が後に理解できました。「仕事としての研究」というものを少し分かるようになりました。

多田先生に初めてお目に掛けてから35年が経過し、小児科学教室を主宰する7代目小児科教授(多田教授は4代目)となり、2021年末で退職しました。多田先生の様な大教授になることはできませんでした。特に、original workの推進を第一に掲げ、それに向けて邁進する姿勢と情熱には及びもつきません。多田先生が、学士院賞を受賞されたときの副題は「病態を通して生理を知る」でした。以前、希少遺伝病の研究は、多くの人から見向きもされないものが殆どでした。実際、私が代謝異常症関連でない学会で発表する際には、多田先生から必ず「聴衆の誰も高グリシン血症を知らないのだから、丁寧に説明しなくては行けない」と繰り返し言われました。時代は変わり、現在希少遺伝病研究は製薬大企業の大きな研究の柱の一つになっています。この背景には「病態を通して生理を知る」があり、稀な疾患の研究でヒトの仕組みを理解し、それを利用してありふれた病気の新たな治療を開発する、という戦略が実践されています。先生からご教授頂いた、たった一人の患者さんの病態を深く理解する大切さ、流行に左右されないoriginality, original workの重要性、を教室の伝統として一人でも多くの若手小児科医に伝えていきたいと考えています。これまで多田先生から頂きましたご厚情に感謝するとともに、先生の高い意志を受け継いでいきたいと思っています。

これまでお導き頂き、本当にありがとうございました。

追悼 多田啓也先生

上尾中央総合病院 臨床遺伝科
鈴木洋一

私が東北大の小児科教室に進み、小児科医として研修し、先天代謝異常症の研究に携わるようになったこと、医師・医学研究者としての人生に最も影響を与えて下さったのは、多田啓也先生でした。若かったころの私が目指すべき医学研究者としてのあこがれの存在でもありました。その私にとってのスーパースターが逝ったとの知らせを聞いた日から心の中にぽっかりと穴が開いたような空虚感が続いております。

私が東北大学の小児科でお世話になろうと思ったきっかけは、多田先生の講義を聴いたことでした。それは、糖源病1型の原因として、グルコース-6-リン酸の輸送タンパクが関与していることを明確に示した研究の話でした。まだ、病気の原因が分子レベルではほとんど分からなかった時代に、明快な病気の原因を突き止めることのできる研究に私は感激し、多田先生の主催する教室でなにか病気の原因をこの手で明らかにしてみたいと強く思うようになったのでした。人生の1つのマイルストーンとなる講義にあの時出会ったんだと思います。

小児科学の大学院生になった際には、東北大学加齢医学研究所の生化学をご紹介いただくことで、蛋白や分子生物学の基本を学ぶ機会を与えていただきました。そこで学んだタンパク質の精製手法が、小児科に戻ってからチャレンジしたホロカルボキシラーゼ合成酵素の蛋白精製の成功、一次構造の確定につながりました。そして、本酵素の異常で起こる新生児型マルチプルカルボキシラーゼ欠損症の患者さんの分子、遺伝子レベルの病態解明という、私が小児科に入るときに目指していた目標を達成することができました。

多田先生は、当時の医学の先端を切り開く、国際的な医学研究者として輝く存在でした。医学研究者として目指すべき姿と感じておりました。また、先生は常々、国内だけでなく、世界中の人々の役立つことを目指して研究をなさいと言っておられたことが、今でも記憶に残っています。意識的に世界レベルでの研究成果を上げることを目指している先生だったんだなあ、今改めて思っております。仙台で先天代謝異常の国際学会を主催した際にはスタッフとしての仕事をさせていただきました。貴重な経験となりました。

全く私事で恐縮ですが、私の結婚の際には仲人の労もお取りいただきました。

多田啓也先生、これまで、わたしの人生にとって貴重でかけがえのないご指導をいただきありがとうございました。生前に、お会いして感謝の念をお伝え出来なかったことが残念でなりません。不祥の弟子のこととお許し下さい。

多田啓也先生の思い出

自治医科大学臨床研究支援センター
久米 晃啓

多田啓也先生のご逝去を知ったのは昨秋のことであった。時候の挨拶も滞りがちで案じてはいたが、やはり伏せておられたと聞いた。今般、東北大学小児科同窓会を通じて、日本先天代謝異常学会の追悼集に一文を寄せる機会をいただいた。とりとめもない個人的な思い出ではあるが、先生の人となりを偲ぶことになればとお引き受けした。

多田先生が小児科の教授として仙台に戻られたのが1977年、ちょうど私が大学に入学した年にあたる。最初に先生をお見かけしたのは、新しくなった医歯学部生協と記憶しているので、学部進学の前後だったのだろう。カウンターの隣で、「小児科の多田ですが」という凜とした声に振り向くと、そこに白衣の紳士が立っておられた。当時から小児科医を目指していたこともあり、「このダンディーな方が小児科の教授か」と強く印象に残った。学生時代はろくに講義も出ていなかったのも勉強の記憶はほとんどないが、卒業直前に、「小児科の臨床講義は国試対策シリーズでとても面白い」という評判を聞いて出てみた。多田先生が一通り過去問を解説された後、「乳児の発達マイルストーンは、サブ、ロー、キューで一発回ってリーチ」と締めくくり、やんやの喝采を浴びつつ講堂を後にされた姿は今でも鮮やかに甦る。

それと前後して医局の説明会に参加した際、「初期研修を終えたら大学院に入って代謝異常の分子生物学的研究をしたい」と先生に申し上げたら、「勉強するなら若いうちの方がいい。日本人は目下の者から学ぶのが苦手だから。」と背中を押してくれた。2年経って改めて進路についてご相談したところ、ちょうどグリシン開裂酵素の遺伝子クローニングを始めようという時にあたり、先輩の呉繁夫先生とともに富山で実験に明け暮れることとなった。多田先生は基本的には短気な方だと思うが、弟子に対しては辛抱強く接して下さった。そのお蔭で、グリシンについても時間はかかったがそれなりの結果を出すことができ、先生のライフワークに些かの貢献ができたものと自負している。

大学院修了後、自らの行くべき道についてしばらく葛藤の時期もあったが、その中で瓢箪を振って留学という駒を出してくれたのも多田先生である。さらに、帰国にあたって、医局に戻らずに研究を続けたいという私の願いを快く認めて下さった。幸いなことに、赴任先の熊本大学には松田一郎先生や遠藤文夫先生はじめ多田先生とは縁の深い方々も多く、暖かく迎えて下さったので、第二の母校のように過ごすことができた。熊本から自治医大に移ってからも、何かと気にかけてくれていたことは心に染みた。写真は、そのような折り、奈良で先生が小児科

科学会賞を受賞された際、弟子たちがご夫妻を囲んでお祝いをした時のものである。肩の凝らない会でお二人にも楽しんでいただけたことを良い思い出として、改めて先生のご冥福を祈りたい。



「多田先生ご夫妻を囲んで(2009年4月、奈良)」

前列: 多田啓也先生、千代子夫人

2列目左から(敬称略): 呉繁夫、松原洋一、大浦敏博、
早坂清、坂本修、小松崎匠子

3列目: 久米晃啓



多田啓也先生を偲んで

東北大学医学系研究科 遺伝医療学分野
青木洋子

多田啓也先生のご逝去にあたりまして、謹んで哀悼の意を表します。多田先生の東北大学小児科教授時代の末席の医局員として一言御礼の言葉を述べさせていただきます。

私の中にある多田先生の最初の記憶は、医学部学生の時の小児科の講義です。階段教室の講義机に木製の書見台を持参され、そこに教科書を置いて、黙々と講義をされるのですが、時々ユーモアのあることをおっしゃりニコっとされ顔をあげられる、それが聞きたくて講義に出席しておりました。卒業後小児科の医局に入局し、初期研修後に無性に研究がやりたくなり、多田先生に相談に行きました。そのうえで紹介されたのが成澤邦明先生の主宰される病態代謝学教室でした。大学院では成澤先生、松原洋一先生、呉繁夫先生、鈴木洋一先生にご指導頂き、ホロカルボキシラーゼ合成酵素欠損症のクローニングと初めての変異同定という連の貴重なプロセスを勉強することができました。大学院時代にミラノで行われた国際先天代謝異常学会に参加した際には、東北大学小児科や病態代謝学教室が「Keiya Tada」の流れをくむ教室として、海外のラボから大変尊敬されていることを知りました。私が大学院3年の時に多田先生は退官されましたので直接ご指導を受ける機会は少なかったですが、私のような大学院生にも「先生、成澤先生のところはどうか、がんばっていますか」といつもにこにこ声をかけて頂きました。

大学院で研究の楽しさに魅せられ、その後も研究を続けられたのは、最初に道を示していただいた多田先生のおかげと心から感謝しております。私は現在、成澤邦明先生、松原洋一先生の後を引き継いだ形で、遺伝医療学分野を運営させて頂いております。先天代謝異常症の研究からはご無沙汰しておりますが、がん原遺伝子変異をもつ疾患の研究を行っておりますので、がん代謝としてあらためて代謝の勉強に取り組んでいるのも何かの縁かと思っております。多田先生の流れを継承する研究室としてこれからも身を引き締めて研究を行っていきたいと思います。

多田先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

多田啓也先生を偲んで

東京慈恵会医科大学
副学長・医学部看護学科
大橋 十也

多田先生の訃報に接し心よりお悔やみを申し上げます。多田先生は日本の先天代謝異常症研究・教育の礎を築いた方であり本当に残念でなりません。

私にとって、特に若いときは多田先生は、まさに雲の上の存在であり、とても気楽にお話し出来る存在ではありませんでした。ただ、本学出身の北川先生とは研究会・学会設立の盟友であり、衛藤先生とも近い関係であったこともあり、時々お声をかけて頂いたり、食事を一緒にさせていただいたりしておりました。最近では年賀状のやり取りぐらいで、どうされているのか気になっていたのですが、その折の訃報で本当に驚きました。

多田先生の思い出で、まず思い出すのは2000年に英国のケンブリッジで開催されたICIEMです(写真)。多田先生は2003年のICIEMを衛藤先生を会長として東京開催を誘致するため大変なご努力をされておりましたが、本学会で次期開催地が決定されることになっていました。そのため多田先生と慈恵グループは密接に行動しておりました。残念ながら2003年はオーストラリアのブリスベンになったのですが、2006年には念願がかなって東京で衛藤会長のもと開催出来ました。もちろん多田先生の御努力があつての誘致成功であつたと感謝しております。その縁あつて、その後は多田先生と学会招聘外人と旅行に同行させて頂いたりし、以前より親しくお話し出来るようになりました。退官された後のお住まいが私の家から比較的近い成城学園であつたこともあり、成城学園の喫茶店に呼ばれて御馳走にもなりました。また、東京に住まわれておりましたので、慈恵の関連病院で診療されておりました。そんな時、おそらく原稿を依頼されたのだと思いますが、当時はPubMedなどもない時代で慈恵の図書館に文献を調べにいらっしゃられた後、私の研究室で丸一日、原稿をご執筆されたことがありました。ほぼトイレ以外は微動だにせず、黙々と物書きをされており、その集中力には本当に驚かされ、やはり何かを成し遂げられる方は私など凡人とは違ふと感心致しました。

私も定年退職して、先天代謝異常症の診療・研究の第一線からは身を引きましたが、多田先生の御意志は後輩たちに確実に引き継がれております。どうぞ、安らかにお休みください。





多田啓也名誉教授先生 追悼文

岐阜大学小児科名誉教授
折居 忠夫

多田啓也先生におかれましては令和3年8月27日にご逝去されたとの突然の訃報に接し、大変驚いております。ご遺族の皆様のご心痛いかばかりかとお察し申し上げます。多田先生のご生前の多大な御功績、特に先天代謝異常分野における多大なご貢献を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

多田先生は、先代の荒川教授より先天代謝異常症の研究を行うよう指示され研究を開始されました。当時の先天代謝異常症の研究は困難を極めましたが、多田先生は勇猛果敢にこれに取り組まれ多くの成果を挙げられました。多田先生の研究成果は、世界中の研究者によって追試され多くの論文が発表されております。

多田先生とともに北海道大学や札幌医科大学などの全国の研究者が集い、昭和40年に小児代謝研究会を立ち上げられ、現在の日本先天代謝異常学会へと引き継がれてきております。日本における先天代謝異常症の研究、臨床の土台を築いてこられ、その御貢献は大変大きなものがあります。多田先生の切り開かれました道を、御同門の若い先生方や、全国の若い研究者がさらに発展させていただけることを期待しております。

多田啓也先生を偲んで

大阪市立大学大学院医学研究科
障がい医学・再生医学寄附講座
新宅 治夫

多田啓也先生は1970年に高井俊夫教授の後任として大阪市立大学医学部小児科学教室の3代目の教授に就任されました。そして翌年に、大浦敏明先生、北川照男先生と共著で「フェニルケトン尿症—スクリーニングから治療まで」を出版され、1977年に日本で新生児マススクリーニングが公費で始められるようになる道筋をつけられました。1977年は私が卒業する前年ですが、大阪市立大学小児科教授を退任され東北大学小児科の教授に就任されました。私が小児科に入局した1978年には新任の一色玄先生が4代目の教授に就任されたところでしたので、多田啓也先生から直接ご指導を受けたことはありませんでした。私の先輩の田中あけみ先生が多田啓也先生の大変すばらしい講義を受けておられて、それで小児科に入局しようと思うようになったそうです。私は卒業後すぐに大学院に進学し、大浦敏明先生のご指導で悪性PKU（現在のBH4欠損症）の研究を始めましたが、私が大学でプテリジン分析の実験をしている時に田中あけみ先生が横に来て「その分析装置いくらするか知ってる！」とか「多田啓也先生はすごい先生で実験室にある高額な機器はみんな多田先生が購入して置いていってくださったんですよ。」など多田先生が、えらい、すごい、というお話をよくしてくださいました。そのような時に「なるほど、文献にあるような世界最先端の研究をするにはそれなりの高額な分析機器が必要になるので、ここでそのような研究ができるのは多田先生のおかげなんですね」と感心しながらお返事すると大変うれしそうにされていたのを思い出します。スイスに留学中には、チューリッヒこども病院でもBH4欠損症の診断にガスリーろ紙でDHPR活性の測定が行われていましたが、「これは東北大学の多田先生の教室で開発された方法ですよ」など多田先生のお名前がよく話題になっていました。さらに帰国後にBlau先生から問い合わせがあり、「BH4欠損症の総説を書いているが、世界で最初に悪性PKUが報告されたのは1975年のSmithらの論文だが、1969年にTada Kらが報告した高フェニルアラニン血症の兄弟例はDHPR欠損症ではないか」という質問でした。「そうです、1980年に脳の石灰化を報告したDHPR欠損症の兄弟例の新生児マススクリーニングで発見時の最初の報告です」とお答えしましたが、実にSmithらの報告よりも5年以上まえにPKUのgenetic variantとしてBH4欠損症の存在を指摘しておられたのでした。多田啓也先生の功績をたたえと共に、心から尊敬と感謝を捧げ謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



多田啓也先生、ありがとうございました

元学会理事
鈴木 義之

いつか個人的にお礼をと思いながら、ついにその機会を逸してしまいました。改めてその理由を書かせていただきます。

大学は違いますが、多田先生は私の7年先輩。私が東大小児科教室に入局した時には既に東北大多田グループが華やかにアミノ酸研究の報告をしておられ、目を奪われました。私は学生時代から中枢神経系に興味を持ち、卒後数年間は臨床神経学、神経生理学の立場から神経外来で文字通り毎日診療を行っていました。英国 Sherrington 先生のイヌ除脳硬直の実験により体系化された原始反射、姿勢反射の理論をもとに、ヒト患者の体動や姿勢を眺めていました。学位論文も脳性まひ。

しかしながら当時の東北大学のきらきらした成果に無関心でいることはできませんでした。教室の先輩がささやかに仕事しておられた代謝研究室に出入りし、尿アミノ酸のペーパークロマトグラフィー分析のお手伝いをしていました。処理後の尿資料を40cm四方の大きな濾紙の隅に塗布し二次元展開。第一日はフェノール・水、第二日は酢酸・ブタノール・水でそれぞれ一晚放置。二日で一検体。むろん複数検体を同時処理しましたが、時間がかかるスクリーニング検査。それでも脳性まひの臨床観察をまとめた学位論文を仕上げるまでの期間に、研究室で二千数百検体を処理しました。あまり大きな成果は出ませんでした。臨床神経生理学に興味を持つ小児科研修医が生化学的手法にもかかわっていたことには意味があったと思っています。これは間違いなく多田先生のおかげと、陰ながら恩師として尊敬しておりました。

以後3年余り、米国で神経化学の勉強をさせていただく機会が与えられ、帰国後はアミノ酸とは別の、水に溶けない化合物・脂質、そしてその代謝につながる酵素を調べてきました。一方臨床神経学の診療はそのまま続け、現在に至っています。患者さんとは長いお付き合いで、30年50年という方も少なくありません。

このような生活をしながら先天代謝異常学会で多くの先生方とお会いし、特に多田先生には何かと個人的にもお話を伺う機会を作っていただきました。国内では極めてご多忙な生活を送っておられましたが、国外の学会旅行では少しは時間的余裕がおりだったようで、先々で二人だけで何かとご助言をいただきました。それに応えることができたかどうかは分かりませんが、診療と研究について多くの見方考え方を教えていただきました。ご退官後、東京に移られましたが会合の場でお目にかかることもまれで、残念ながら改めてお礼の言葉を差し上げる機会がありませんでした。

遅くなってしまいましたが、この場を借りて厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。今後はゆっくりお休みください。

多田啓也先生を偲んで

久留米大学 高次脳疾患研究所
芳野 信

多田啓也先生のご訃報に接し、心から哀悼の意を表します。

私が多田啓也先生のお名前に初めて接したのはピルビン酸カルボキシラーゼ欠損症に関する文献を通じてでした。この疾患は、多田先生がたがヨーロッパのグループと同じ年に独立的に世界にさがけて記載されたことを知り、深い感銘を受けるとともに私も将来このような世界に発信できるような研究がしたいと大きな励みになりました。その後、ご縁があり小児代謝研究会、先天代謝異常学会等の学会活動や、厚生省(当時)の研究班での活動を通じて種々の局面でご指導をいただきました。特にヒスチジン血症をマススクリーニング検査対象項目から除外する決定に関する英断はいまだに忘れられません。この間、第4回国際先天代謝異常学会(1987年)を仙台市でわが国としては初めて主催され成功裏に終えられました。それまでは世界の先天代謝異常症の研究や診療は西ヨーロッパ諸国+豪州と北米の二極で動いている感がありましたが、この学会の開催を機にわが国が世界での第3の極になったと実感しました。これも多田先生の強力なリーダーシップがあればこそ実現したものと思います。先生は先天代謝異常症全般で多大な業績をお持ちですが、特に高グリシン血症の研究では世界をリードする成果を挙げられ、それに対して学士院賞を受賞された(1993年)ことは広く知られているとおりです。個人的な思い出で恐縮ですが、ある学会で私がピルビン酸脱水素酵素複合体の構成分子であるジヒドロリポイル脱水素酵素とグリシン開裂反応系のL-タンパクと呼ぶ成分の異同(現在では同一のタンパク質であることが確定している)について発表したときのことで。発表を終えた直後、会場のあまりの静けさに私はなにか致命的な論理の誤りをしでかしたのではないかと一瞬、心臓が凍り付きそうになりました。ややあって多田先生が立たれて、とても明快な解説的発言をしてくださり、ほっとすると同時に大変ありがたく心にしみたことをいまでも思い出します。また人材養成にも心を砕かれ、ある国際学会の場で“あなたがた若手を育てるのが私の務めと思っている”といわれ、海外の先生方に私を紹介してくださったのが今でも脳裏に鮮明に残っています。まだまだ思いではつきませんが、多田先生が遺された理念と数々の知的財産がこれからも脈々と受け継がれてゆくことを願っています。

多田先生、本当にありがとうございました。安らかにお休みください。

多田啓也名誉教授のお別れの会

東北大学医学部小児科
菅野 潤子

多田啓也名誉教授のお別れの会は、令和4年2月13日、江陽グランドホテルで執り行われました。江陽グランドホテルは、様々な学会や小児科の行事が行われた場所で、多田先生がいつもご宿泊されていた思い出深い仙台の老舗のホテルです。本来ならば、多くの先生方にご参列頂く予定でしたが、コロナの感染状況に伴い催事はすべてオンライン開催との大学のガイドラインに則り、呉先生とご相談し、苦渋の選択でしたが本会もオンライン開催と致しました。会場には、全国の先生方から頂戴したご供花がご遺影を取り囲むように美しく飾られました。沢山の思い出のお写真を展示致しました。当日は、ご多用にも関わらず、オンライン開催ではございますが、多くの方々にご会葬賜り誠に有難うございました。実行委員の一人としてご厚情に深謝申し上げます。

会の初めに東北大学小児科学教室准教授笹原洋二医局長よりご挨拶をさせていただきました。その後、多田啓也先生を偲び一分間の黙祷を捧げました。多田啓也先生のご略歴ご紹介に続きまして、故人と御親交の深かった先生方より、お別れのお言葉を頂戴致しました。東北大学名誉教授、今野多助先生（笹原洋二先生が代読）、NPO法人こどもの村東北理事長、石巻赤十字病院名誉院長、飯沼一宇東北大学名誉教授、東北文化学園大学学長・理事長、土屋 滋東北大学名誉教授、日本先天代謝異常学会理事長、国立成育医療研究センター臨床検査部統括部長、奥山虎之先生、独立行政法人国立成育医療研究センター研究所長松原洋一東北大学名誉教授、仙台市小児科医会会長、めときこどもクリニック院長目時規公也先生よりお別れのお言葉を頂戴致しました。また、沢山の弔電・供花を頂きました。献花に続き、ご遺族を代表いたしまして多田千代子さまより、お礼の言葉を頂きました。最後に、実行委員会委員長東北大学小児科同窓会会長、宮城県立こども病院院長、呉繁夫先生よりお礼の言葉を述べさせていただきました。オンラインとはなりましたが、ご多用にも関わらず、多くの方にご会葬いただき誠に有難うございました。

私は、多田先生の退官の年の、平成5年の入局で、先生がご在職中は殆どお話したことはありませんでした。その後、医局員として育つうちに、多田先生の偉大さに触れる機会は多々ございましたが、自分が、このような会の実行委員を務めたり、お別れの会の司会進行や御遺稿集の編集に携わることになるとは、若い頃には夢にも思いませんでした。多田先生がご指導された呉先生や松原先生の教えを受け、また、下の世代へと継承していくという務めに微力ながら関わられたことを心より誇りに思います。今後も、東北大学小児科の同窓会員の一人としてその名に恥じぬよう精進していきたいと思いを新たに致しました。多田啓也先生、どうぞ安らかにお休みください。そして、東北大学小児科を、日本先天代謝異常学会を、世界中のすべての子供たちの未来を天国から見守ってください。合掌。



